食物アレルギーと
特異的IgE検査
（いわゆる「アレルギーの採血」）
に関するアンケート調査の
まとめ

はらまちスマイルクリニック

はらまち
スマイル
クリニック
HARAMACHI SMILE CLINIC

はじめに

- ２０２６年２月～３月にかけて、お子さんとともに来院されたご家族の方を対象に

  「食物アレルギーに関するアンケート」にご協力いただきました。誠にありがとうございました！
- このアンケート調査結果についてまとめましたので、

  よろしければご覧ください。
- また食物アレルギーに関して受診される際の参考にしていただけましたら幸いです。

アンケートの内容

- 食物アレルギーに関して受診した場合を想定した事例を提示し、そのときにどのように考えるかを「受診したお子さん（中学生以下）の保護者」の方に回答していただきました。

提示した事例①:

あなた(保護者の方)はアレルギー科を受診しました
採血検査(特異的IgE検査)をおこないました
結果で「鶏卵に対して採血で反応がありました」
しかし、あなたは
「それまで日常的に鶏卵の料理を気にせず
食べることができました」
結果説明の際、医師から
「いままで鶏卵料理を食べていたなら、
気にせず食べても大丈夫ですよ」
と言われました。

アンケート項目①:

保護者の方が

「食物（鶏卵）アレルギーがあるかどうか」心配を感じる度合い:「０～１０」の数値で回答

「対象食品（鶏卵）」をその後も継続的に食べることができるかどうか:「はい、いいえ」で回答

提示した事例②:

*あなたの**お子さん**はアレルギー科を受診しました*
採血検査(特異的IgE検査)をおこないました
結果で「鶏卵に対して採血で反応がありました」
*しかし、あなたの**お子さん**は*
「それまで日常的に鶏卵の料理を気にせず
食べることができました」
結果説明の際、医師から
「いままで鶏卵料理を食べていたなら、
気にせず食べても大丈夫ですよ」
と言われました。

アンケート項目②:

保護者の方がお子さんについて

「食物（鶏卵）アレルギーがあるかどうか」心配を感じる度合い:「０～１０」の数値で回答

「対象食品（鶏卵）」をその後も継続的に食べさせることができるかどうか:「はい、いいえ」で回答

結果

実施期間：2026年2月17日～3月11日

アンケート回収数：499/500例（99.8%）

除外例：96例（不同意2例、回答に不備94例）

⇒有効回答403例を解析対象

回答した方の背景情報：

年齢：35.9±6.2歳（平均±標準偏差）

男女比：男性52名、女性351名

結果のまとめ

- 提示した事例について

①保護者の方自身より<u>お子さんの結果に対して</u>
<u>「食物（鶏卵）アレルギーがあるかどうか」</u>
<u>心配を感じる度合いが高い</u>

保護者自身への心配度：4.0±2.7
お子さんへの心配度　　：5.6±3.0 （$p<0.01$）
（※数値：平均±標準偏差）

②保護者の方自身より<u>お子さんについて</u>
<u>「対象食品（鶏卵）」の摂食をためらう割合が高い</u>

保護者自身の摂食継続割合：79.2%
お子さんの摂食継続割合　　：62.5% （$p<0.01$）

結果を踏まえて・・・①

「食べられる食品」について採血をおこなうと・・・

⇒食物アレルギーへの心配を誘発してしまうリスク

・食物アレルギーガイドラインの記載内容
「詳細な問診（お話をよく伺って）」を踏まえて
検査（採血＝特異的IgE検査 等）を実施しましょう
と記載されています

・採血（特異的IgE）で反応があること
≠「必ずしも症状の原因とは限らない」ですので
結果の解釈には十分注意が必要です

日本小児アレルギー学会.食物アレルギーガイドライン2021.東京:協和企画, 2021.

大事なことは
「採血だけで食物アレルギーの診断はできない」
ということです！！

結果を踏まえて･･･②

「食べられる食品」について採血（特異的IgE）で反応あり
⇒その食品を食べないという選択をしてしまうリスク

・他の研究結果

複数項目での採血（特異的IgE検査）に関して
⇒両親への不安感を誘発するという報告があります

Parrish P C. Ann Allergy Asthma Immunol 2023; 131: 421-426.

⇒過剰診断（＝不必要な除去）を誘発しうるため検査実施について注意喚起しているものもあります

Bruijnzeel-Koomen A F M C. Ned Tijdschr Geneeskd 2007; 151: 2248-2250.

結果を踏まえて･･･③

・食べられる食品に対する特異的IgE検査を実施してしまう状況
⇒以下の同時多項目測定を実施する場合が想定されます
マストシステムズ®（日立化成）
Viewアレルギー39®（サーモフィッシャーダイアグノスティックス）
ドロップスクリーンA-1®（日本ケミファ）
⇒食物アレルギーガイドラインの記載：
上記の検査について「**食物アレルギーの診断・臨床評価に直接用いることは推奨できない**」と記載あり

日本小児アレルギー学会.食物アレルギーガイドライン2021.東京:協和企画, 2021.

⇒食物アレルギーの適切な診断のためには下記が重要です
①「詳細な問診（症状の出る状況を確認）」の実施
②そのうえで「必要な項目（特異的IgE検査 等）を選んで」実施する

まとめ

①食べられる食品について採血（特異的IgE検査）
を行う必要はありません
（**むしろ不利益を生じる可能性**があります）

②採血（特異的IgE検査）を行なう前に
「症状が起きた状況」を確認する必要があります

③採血（特異的IgE検査）はあくまで「診断の補助」
であることを知っていただきたいと考えます
（採血だけで食物アレルギー診断はできません）

☆ご不明の点は診察の際などにご質問ください☆
どうぞよろしくお願いいたします。

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問①

＜模擬症例について＞

①本人が摂食する、子どもに摂食させることに
　ためらいが生じる

②説明される内容によって考え方が変わるかも
　しれない

⇒今回の調査結果の通り
　「疑わしい症状に基づいて必要な検査をする」
　という対応が重要です
　気になる症状があればぜひご相談ください

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問②

＜アレルギー症状について＞

①小児-成人で症状の出方に差があるか？

②体質改善で症状が軽くなることはあるか？

⇒原因の種類（食物、環境中の物質など）によって年を重ねることによって症状が変化することがあります

またアレルギーの種類により「体質改善」が期待できる治療もあります

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問③

＜アレルギー症状について＞

③症状は体調により変化があるか？

⇒いわゆる「かぜ」など体調不良時にはアレルギー症状が出やすくなる状況があります

④症状が出た時の対処方法は？

⇒症状の種類によって「内服薬」「外用薬（塗り薬、吸入薬など）」「注射」といった選択肢があります。病状により選択が変わりますので当院にご相談ください

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問④

＜アレルギーの診断について＞

①気になる症状がある場合、受診してよいか？

⇒**ぜひ受診してください！！**

症状によってアレルギーではない場合もあります

必要に応じて検査・治療等も提案いたします

②症状の程度による受診する目安は？

⇒症状は様々あります。気になる症状があれば

早めに医療機関への相談をお勧めします。

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問⑤

＜検査（採血等）について＞

①アレルギー検査は症状がなくても受けたほうがよいか？採血検査でアレルギーがわかるか？

⇒ぜひ今回のアンケート調査を再読してください！

「採血だけで診断はできません」

②年齢による採血検査結果の変化があるか？

⇒原因物質の種類によって採血反応が自然に減っていく場合があります

また年齢を重ねて新たに反応が出る場合もあります

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問⑥

＜食物アレルギーについて＞

①アレルギー反応がなかった食品が反応するようになることがあるか？

⇒あります

年長児・成人で発症しやすいものとして「果物類、甲殻類」といったものが代表的です

②診断された食品の摂取方法は？

⇒**食品の種類によって異なります**

ぜひ当院にご相談ください

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問⑦

＜アトピー性皮膚炎について＞

①アトピー性皮膚炎と診断できる目安は？

⇒診断基準は下記です

１：かゆみがある

２：特徴的な皮疹、分布（左右対称など）

３：慢性・反復性の経過

※慢性：乳児・2か月以上、その他・6か月以上

佐伯秀久，他. アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2024.日皮会誌 2024; 134: 2691-2777.

気になる皮膚症状があればぜひご相談ください

＜追記＞
自由意見で頂いたご意見ご質問⑧

＜花粉症/アレルギー性鼻炎結膜炎について＞

①花粉症に対するアレルギー検査の実施可能時は？

⇒**年齢は問いません**

※ただし保険診療のルール上、**当院では「小学生以上」での実施としております**

※早めに採血したい場合には「小児科以外のクリニック、病院の小児科」での相談をお勧めしております

②年少児でも花粉症があるか？

⇒2019年の調査では「スギ花粉症」は

０～４歳：3.8%　５～９歳：30.1%

１０～５０歳代：４５～４９%　という数値が出ています

日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会.鼻アレルギー診療ガイドライン2024年版.東京:金原出版, 2024.